



*salus animae in visum animum dimittit*

抒情丸 小助



丸の内線新宿3丁目駅を上がり新宿通を東へ向かって歩き、御苑大通りの2つ目の道を入っていく。如何にもなという外観ではないが、この界隈では知らない人はいない店。

階上は食事とショーを楽しめる大人の社交場『ラ・カージュ』、路面の1階はカフェ、階下は葉巻と酒が充実しているバー『ヴィディアム』。年中客が絶えることがない経営手腕は他の追随を許さない。『ラ・カージュ』の内装は19世紀のパリ、ホテルリツツやサヴォイの雰囲気を漂わせるクラシカルな調度品が整えられていた。蘭子ママの感性がいかんなく發揮され、おそらくは本物のアンティーク。ゆえ来店した客の満足度は、高かった。

『ヴィディアム』はシックなトーンでまとめられていて落ち着いた店内。仄かな間接照明は柔らかい空気を醸し出す。カウンター、そして美しく陳列された数々のボトルがより映える棚、テーブル等はマホガニー製というある意味、贅沢な説え。時間を忘れ、美味しい酒とふくよかな味わいの葉巻を嗜む極上の店である。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

氷河は、霧雨が降る中を歩いている。コートが濡れることも気にしない夕暮れの街の風景を眺めながら。いつも歩き慣れた舗道は光を跳ね返す。人の流れは彼の存在を気にもしない。いつからかこの街に溶け込んでいる自身を自嘲気味に受け入れていた。店に着いて、階段を上がって『ラ・カージュ』の扉を開け、中にいるスタッフに蘭子ママの所在を尋ねる。下だと教えられて、階下の扉を開ける。いつもはかかっていないクラシックが流れる中、ママは細い葉巻をくゆらせブランデーを嗜んでいる。常はピアノによるジャズやシャンソンだが、今流れているのは聞き馴染みのない不思議な曲。蘭子ママに声をかける。

「蘭子ママ、こちらにいらしたんですね。押上の店の売り上げを届けにきました。」カウンターの真ん中あたりで、飲んでいる横に立ち氷河は告げた。

「あら～、いらっしゃい氷河ちゃん。ああ、いつものネ、ありがとう。」灰皿に葉巻を置いて、氷河が差し出す封筒を受け取る。「貴方に任せて、本当に間違いなかったワ。私の目に狂いはなかった。この調子で、よろしくね～」

蘭子ママはグラスのメタクサ・オリンピアをひと口、喉を潤した。用件は済んだものの、いつもより感じが違うと思った氷河は、立ち去りがたい何かに捉われていた。蘭子ママは、何かの思いをまさぐる様に遠い視線を彷徨わせている。店内に流れる曲に身を任せている様な...氷河は、どう切り出して良いのかがわからないままに、佇んでいた。

「今日はネ、ちょっと違うの。昔、知っていたある人の十三回忌なの...もう皆んなどうの昔に忘れて、誰も覚えていないわきっと。覚えているのはあたし位ね...」灰皿の葉巻を再び手に取り、静かに吸う。

「今流れている曲はね、その人がよく聴いていたの。〈トゥオネラの白鳥〉という作品。世間にはあまり有名じゃないけど、あたしもこの曲は好きだったワ。色々なことがあって、生きていることが辛くなって、とうとう世の中に別れを告げた...」もう一度、グラスをあおり喉を濡らす。

「ごめんね、貴方には関係ない話をして...」カウンターに座るママを見つめていた氷河は、「俺こそ、何もお役に立てなくて...」

大切な人だったんですね。ママにとって。」

「そう…ね…あたしだけでも覚えていてあげたいと、思ってる。その人が死ぬ時、〈トウオネラの白鳥〉のレコードを逆回転させて、命を絶った…大切な人が迎えに来てくれると、信じていたから。」告白を聞きながら、第三曲に入っている旋律が、うねる様に店を満たす。

「そんなこと、あるハズないのに…でも本当に逝ってしまった…。未だに止めることが出来なかった自分を、許せないの。」

氷河はカウンターの中に入って製氷室を開け、アイスピックを使い氷を砕き始めた。その様子を見ながら蘭子ママは、声をかける。

「氷河ちゃんを初めて見た時、生に向かって生きている様な気がしなかったのよ。何かたくさんの思いを抱えて、むしろ過去に生きているような…貴方は何も話さないから勝手に思っただけなの。でもこの前、女の子と遊んでいるのを偶然見かけた時、二人はまるで時間から切り離されているみたいだったワ。きっとあたしの思い過ごしよ！ごめんねエ、気にしないでね～」氷河は反論せず蘭子ママの語る言葉をそのまま聞いていた。

「トウオネラってね、黄泉の国なの。黒い水を湛えた涯が見えない川があって、その川を渡ると戻ってこない。そこには白鳥が浮かんでいて、導かれながら旅立つの。苦しみも哀しみもない世界へね…でも本当はそんなの信じちゃダメだと思ってる。貴方は誘惑なんかには決して負けないってことだけはあたし、確信しているのよ」灰皿に置いていた葉巻の紫煙の揺らめきを見る中、蘭子ママはそれを手に取り一息吸うと「追悼はオワリ。また、いつもの時間が動き出すワ。氷河ちゃん、気付けに一杯よくて？」と、促す。

軽く頷くと慣れた手つきで、カクテルを作る。〈デプス・ボム〉アルコールが強め、甘みも少ないそれは、蘭子ママのお気に入りのひとつだった。

店を出ると、すでに夜の賑わいで街の中は活気づいている。高揚感を抱いて押し寄せる人の波の中を駅に向かい、地下鉄のホームで着いたばかりの車両に乗り込むと一息ついた。止まる駅は四つ。帰宅までのわずかな時間にふと先程の蘭子ママとの会話が、頭に甦ってくる。暗い窓ガラスの向こうに何か空間が見える錯覚がある。俺も少し感化されたのかと苦笑した。

最寄りの駅から足早にマンションまで戻ると、オートロックのエントランスを抜け、エレベーターに乗り込むと階数のボタンを押す。心地よい浮揚感と振動に身を任せていると十二階に着く。エレベーターホールから部屋へと歩き出す。

玄関の扉にまずカードを差し込み解除し、もう一つ鍵を回して内側へ入る。靴を脱ぎ、廊下を進むと温かな光に照らされたリビングで瞬が待っていた。

「おかえり氷河。吉乃が一緒にお風呂に入ってくれて、ナターシャはご機嫌だったみたい。楽しそうな声が聞こえてたよ。その後二人で絵本を読んでいたけど、そのまま寝ちゃった。吉乃は僕の部屋に戻ったからこれから送って行く。」氷河に預かっていたスペアキーを渡すと椅子から立ち上がり、玄関へ向かった。

「ああ、助かったよ。ありがとう瞬、世話になったな」

「どういたしまして。それじゃあおやすみ」ひらひらと、手を翻しながら玄関の扉を閉めた。瞬が帰った後、洗面所で着ていた衣服を脱ぎ、洗剤とともに洗濯機へと入れタイマーをセットした。未だに浴槽に浸かることが苦手な為、シャワーを浴び

るだけなので不自由を感じることはなかった。ひとしきり全身を洗い流し気持ちが切り替わると、バスローブを纏いリビングへと戻ってきた。キッチンの横にある冷蔵庫の中からミネラルウォーターを一本取り、渴いた喉を潤す。

ダイニングテーブルの上に飲みかけのボトルを置いて、そのまま部屋を横切り窓の外を眺めた。夜景の中に白いガウンを着た自分が映る。その姿はただ一人、この世界に存在していることを再認識させてくれるかのようであった。終了コールが鳴る洗濯機に戻り、取り出した衣類をランドリールームに慣れた手つきで干すと、新しいルームウェアに着替え寝室のドアを開けた。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

灯りを落とした寝室に流れる穏やかな眠りの気配が、氷河をホッとさせる。常に緊張感が無意識であれ付きまとっている自分に対して唯一、解放してくれる状態だった。

少し寝顔を見つめてのち、自身のベットに潜り込んだ。

景色が目の前に広がっていた。それは今まで見たことのない風景。辺りを見回しても人影はなく、薄明の中、目を凝らして何かを確認しようとすればするほど、その輪郭は滲んでしまう。

満々と水を湛えた黒い水面…その畔りに立っている自分に氷河は気づいた。足元に寄せる波の微かな音を耳にしながら水面を見つめていると、その視界に写るものがある。

ふと意識を凝らすその先に白く浮かび上がる何か…。ふわりとそれは形を成していく。

白い鳥…それは白鳥、一羽の白鳥の姿であった。姿を茫然と見ている氷河にその鳥は見つめ返す。次第に輪郭が揺らぎ姿を変えるとそこに現れたのは人の姿。

「マーマ…」懐かしい姿がそこにあった。常に記憶の中に焼き付いているそのままの…。

思わず近づきたい衝動にかられ、水の中へ踏み出した。とその時、何かが彼の服の裾を引っ張った。その小さな刺激で我に返った氷河が気づくと、それはナターシャの姿であった。

「ナターシャ？」何故この子がここに？驚いている氷河に向かって愛らしい瞳で見つめる。

「パパ。アタシハネ、パパガ、白鳥サンダカラ、アタシハパパノトコロニ来タノ」ナターシャの唇について出てくる言葉の意味を必死になって理解しようとするが、

「キット パパハ、アタシヲ助ケテクレルッテ」真っ直ぐひたむきな顔を向けて氷河に途切れることなく言いつのった。

「何を言ってる？ナターシャ…」動搖を押さえきれずナターシャを抱きしめようとしたが、その腕をすり抜けて波打ち際に立つ。

「アリガトウ、パパ。パパニデアエテ ウレシカッタ。パパノオカゲデ、アタシハ幸セヲモラッタカラ モウ大丈夫ダヨ」満たされた、これ以上ないほどの笑顔を氷河に向けると、振り返ることなく水面を駆けてゆく。淡く輝くママの元へ。

川の中ほどで待つ姿は手を広げ、そしてその胸の中へ腕をいっぱいに広げた小さな少女は飛び込んだ。それ以上美しいものはないだろうと思えるその光景を、氷河は見つめることしか出来なかった。

しばらくの抱擁の後、互いに頬を寄せ二人は幸せそうな微笑みを氷河に見せる。そしてマーマはナターシャを抱きしめ、彼女の首元に結ばれているリボンをほどくかのような仕草を見せる。

するとその姿からは光が溢れ、形をおぼろげにし幾つかの光となった。それらは何人かの子供達。その子達全てをマーマは愛おしそうに見つめ、纏ったガウンに包み込むと顔を上げ氷河に向き直った。声だけではなく、氷河の頭の中に直接語りかけてくる。

「氷河、よくこの子達を守ってくれましたね。本当に有難う。もう心配いらないから安心してちょうだいね。この子達は私と共にいるから貴方は何も苦しむことはないわ。貴方は生きることを真っ直ぐ受け入れて歩いて。それがママのお願いだから…」

氷河の顔は、目の前の光を纏った母の言葉に釘付けになり、微動だに出来なかった。

マーマは、楽しそうな子供達を促しふわりと宙に羽ばたく。その姿に一斉に続き子供達も飛び立ってゆく。いつしか白鳥の姿に変わり、幾羽の白い光は遙か彼方へと飛び去った。

「マーマ、ナターシャ、行かないで！」思わず声を出して叫んでいた。

＊＊＊＊　＊＊＊＊　＊＊＊＊

いきなり意識が覚醒する。しばらく現状が把握できず戸惑っていたが、変わらないベットの上にいる自分を認識した。頭の片隅に今見ていた映像が刻まれていた。あれは…一体何だったのか……。片膝を立て起き上がり、かかる前髪を搔き上げながら隣のベットへ視線を移す。ナターシャの寝息は変わっていない。氷河の夢の中で満足そうな笑顔を見せた彼女は、同じように可愛い寝顔をしている。氷河は見つめながら込み上げてくる感情を抑えられずにいた。

「大丈夫だよ…ナターシャ。パパが何があっても守ってあげるから」自分でも気づかぬうちに溢れ出していた涙を拭い、少し掠れた声で彼女の髪を撫でながら呟いた。

神よ　　その腕の中の　みどり児を　慈しみ給え

穢れ無き魂こそ　その御心に　かないし者

神よ　　与え給え　安らぎと　永遠の自由を

全ての　くびきから　解き放ち　給え

氷河の囁くような声の祈りは、穏やかな眠りの空間に流れた。

この話をご覧下さって、有り難うございます。奇しくも《アサシン.GA.》氷河  
救済本となる次回発行に掲載の予定の一本ではありますが、先行の形で公開  
させて頂きました。ヘニックス町田君とは全く口裏を合わせていなかったの  
ですが、結果として方向性が同じような雰囲気になりました。◆氷河の気持ち  
を形にするというのは、上手くいったかどうかは私自身、判断が難しいの  
でご覧になった方々にお任せしたいと思います。氷河ファンの皆様、どうか  
お許し下さいまし。

2016.02.20. 抒情丸 小助